

日本文化と禅

上田宗箇とその生きた時代

……………小畠 光禅

西行、道元、良寛の短歌（二）

道元の短歌 ……………斎藤 是心

一行庵老師遺句集『冬麗』を

ふたたび ……………淵上 磊山

人間禅の書（四）

今北洪川禅師の書 ……藤井 紹滴



上田宗箇とその生きた時代

小畠 光禅

茶道 上田宗箇そうこ流は、400年の歴史を持つ武家茶の一つです。

流祖上田宗箇が生きた時代は、戦国時代の後半です。それは、毎日いくさに明け暮れ、今日、明日の命の保証がない日々です。そんな中、今 確かなものは、ここで茶を点たてている自分自身だけであり、茶を飲んでいる自分だけです。ただ、今だけです。常に「いつか終わる命」と向き合っていたのでした。しかし、そこには儚はかなさ、空むなしさではなく、きっと温かい、静かな心の充実があったのだと思います。

上田宗箇は、桶狭間の戦いの3年後の永禄6年（1563年）、豊臣秀吉らと同じ尾張の星崎村に生まれました。10歳で父を失い禅寺に預けられ、召し出されて丹羽長秀の侍兒となり、20歳のとき、織田信澄の首を討って天下に勇名をはせました。

丹羽長秀没後には、豊臣秀吉に召され、越前に一万石を領して、豊臣政權中 枢ちゅうすうの側近として仕えました。小田原の戦いの後には、秀吉の媒 酌ばいしゃくで、北 政 所きたのまんどころ（注1）や浅野長政の室いとこ（注2）の従妹である、杉原家次の娘を娶めとります。また、文禄の役では、明使引見の席に重臣として列席するなど信任が厚く、文禄3年（1594年）、豊臣の姓を賜り、従五位下主水 正しゅすいのかみ（注3）・摂津の令（注4）に任ぜられ、常に伏見に侍衛（注5）して、名実共に豊臣一族に列しました。

上田宗箇の名は、茶の湯史上では『利休百会記』に見られます。千利休の茶道を学んだ宗箇は、利休没後には古田織部との親交が深まり、織部とともに大徳寺で参禅し、大徳寺111世春屋宗園禅師（大宝円鑑国

師)より、法諱「宗箇」(注6)、道号「竹隱」を授けられました。

関ヶ原の戦いでは、旧主丹羽長重を応援する途中、その落城を聞いて軍を返し、戦後剃髪しましたが、このときから一般に宗箇を称えました。間もなく蜂須賀家政に招かれて阿波に渡り、徳島城表御殿千秋閣庭園の作庭に当たる側ら、茶の湯指南をして3年を過ごし、その後、親戚関係の浅野幸長に召されて紀州に渡り、一万石高で処遇されました。宗箇の作庭は、他に和歌山城西之丸庭園、名古屋城二之丸庭園、広島縮景園の作庭等があります。

大坂夏の陣では、泉州榎井の戦いに、敵の猛攻を阻む大功を挙げ、徳川家康、秀忠から賞されました。この戦いの最中、急迫する敵を待ちながら、竹藪の竹で茶杓を2本削りました。これが「敵隠れ」の茶杓です。

元和5年(1619年)、浅野長晟の芸州入りに従って広島入りし、広島県西部を一万七千石で領し、翌年から長晟の命により、泉水館(今の縮景園)の作庭に取りかかりました。その間、所領の浅原に一時隠棲し、その後国事を与り、家督を二代重政に譲ってからは、窯を築いて茶碗を焼くなど、茶の湯三昧の晩年であったと伝えられています。

慶安3年(1650年)88歳で亡くなります。遺言により、火葬された骨は槌で砕かれ、宮島の対岸大野の串山の麓から早瀬の海に流されました。

上田宗箇流は、その上田宗箇を流祖とし、現在は上田宗冏宗匠が16代目家元を継承しています。桃山時代に確立した「侘び茶」を、桃山以来約四百年間、武門の茶道として、脈々と現代まで途絶えることなくうつくしく伝えていることから、武家茶の代表的な流儀といわれています。

その伝承の仕方には、他流には見られない独自の特徴がありました。勿論、



点前をする著者

上田家代々も宗箇の茶道を敬愛していましたが、江戸期においては、野村、中村という二家に各々百万石を与えて召し抱え、これに宗箇の茶道の伝承、伝授をさせていました。二家は交代でこの役に当たり、「茶事預かり」と呼ばれ、結局このことが宗箇の茶道をかなり忠実に伝えたものといわれています。

上田宗箇流の作法や所作の特徴としては、

- 一、男性、女性で茶道の点前^{てまえ}に若干異なる部分がある。
- 二、男性と女性の礼の仕方が異なっている。
- 三、袱紗^{ふくさ}を右の腰につける(刀を差していた頃の名残ともいわれている)。
- 四、点前の中の柄杓^{ひしゃく}の構え方、扱い方、帛紗の扱い方が独特である(男性は柄杓の扱いに、馬上の姿や弓矢をつがえる動作が入っている等)。
- 五、点前が直線的で、外へ外へと向ける動きが繰り返されている。などが挙げられます。

合掌

編集部注

(注1)北政所：摂政・関白の正妻を敬っていう語。特に豊臣秀吉の正妻の敬称。

(注2)室：貴人の妻。

(注3)主水正：主水司(律令制で、宮内省に属し、水・粥^{かゆ}・氷室^{ひむろ}のことを司^{つかさど}った役所)の長官。

(注4)令：長官。

(注5)侍衛：貴人のそば近く仕えて護衛すること。

(注6)法諱：法号・法名ともいう。仏教徒になった者につける名前で、俗名に対する称。出家し受戒した後に授けられるので、戒名ともいう。

著者プロフィール



こばたけ
小 昌光禅(本名/達也)

昭和29年、広島県生まれ。近畿大学工学部卒業。仏教大学文学部(通信教育)卒業。中電環境テクノス(株)勤務。茶道上田宗箇流皆伝。昭和50年、藤井虎山老師(仏通寺)に師事。平成12年、人間禅近森潤風老師に入門。現在、人間禅輔教師。

西行、道元、良寛の短歌（二）

道元の短歌

斎藤 是心



道元禅師(宝慶寺蔵)

道元は藤原氏の家系に生まれ、父は通親、母は伊予と伝えられ、幼時から漢籍の多くを読破したという。

8歳の冬 母の死に会い、14歳に母の遺言により出家し比叡山延暦寺で得度。18歳建仁寺に入り栄西の門下 明全に師事、24歳明全とともに入宋、天童山に入り、26歳如浄に只管打坐を学び嗣書を受ける。28歳客死した明全の遺骨を抱いて帰国、建仁寺を出て雲水となり、34歳興聖寺開創、後に永平寺を本山として法を説くこと約10年、京に帰って帰寂している。

帰国して間もなく『普勸坐禅儀』を著し、後に『正法眼藏』を著して曹洞宗の開祖として仏門では大きな存在となっている。

道元の短歌は、折りにふれて詠んだとされる六十余首が帰寂後発見され、今日に伝わっているという。

春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえてすずしかりけり

この一首は、川端康成がノーベル文学賞受賞講演の冒頭に朗吟し、

以来広く知られたという。

詞書に「本来の面目を詠ず」とあり、人間と自然との交わりが美しくとらえられていて、いかにも日本の伝統を言い得た作品であると思う。

都にはもみじしぬらむ奥山は昨夜も今朝もあられ降りけり

永平寺の住居で詠まれたと思われる。

京都ではひと雨ごとに木の葉が染まって、今紅葉が見頃となっていることであろう。ここ奥山では昨夜も今朝もあられが降ったのだからと、越前の空模様から、京都の紅葉を推し量っている。

故郷である京都を懐かしむ思いが伝わってくる。

峰のいる谷のひびきも皆ながらわが釈迦牟尼の声と姿と

道元は「溪声山色」と題して示衆しており、『正法眼藏』にも「溪声山色」の一章がある。

溪声溪色、山色山声、いずれも釈迦牟尼を称えて惜しむところが無い。私たちが坐禅して身心脱落（注1）するならば、自然も惜しみなくその深奥（本来の面目）を現わしてくれるというのである。

道元は山の景色にふれ、谷のひびきを耳にして、仏祖と感応している自己を体感したのであろう。

自然と自己とがまじわる妙境が詠われている。

水鳥の行くも帰るも跡たえてされども路はわすれざりけり

水鳥たちは秋は南に渡ってゆき、春は北へ渡ってゆく。行路には何の跡も残さないが、しかし、水鳥たちはその行路を忘れることがない。

私たちは心に煩惱が生じるとき、本来の自分を見失う。本来無一物。執着すべき対象などこの世に何一つない。私たちはそこに目覚めて、自らに^{そな}負わっている本分を見失わず、行く路を忘れることがない水鳥のようにありたいものであるというのである。

草の^{いほ}庵に起きてもねても祈ること我より先に人をわたさむ

「^{じみとくどせんとた}自未得度先度他」という言葉がある。

まだ自分は救われていないが、先にあらゆる生命あるものを救おうという意である。この願心が深まったとき、めぐりめぐって生命あるものにも「自未得度先度他」の心を起こさせることになる。

この一首から、道元が常に「自未得度先度他」と念じ日々を送っていたことが^{しの}偲ばれる。下句からは、とりわけ道元の^{こんしん}渾身の決意のひびきが伝わってくる。

道元の短歌は、いずれも法理をふまえたところから詠われており、私どもの心に深く導かれるものがある。 (つづく)

編集部注

(注1) 心身脱落：身も心もぬけおちるの意。心身が一切の束縛から解き放たれて自在の境地になること。

著者プロフィール



齋藤^{ぜんしん}是心(本名/正幸)

大正11年、熱海市生まれ。技術士(建設部門)、鉄道建造物の建設と保守に携わる。歌人。昭和28年、窪田空穂門下の大岡博氏に師事。『菩提樹』同人。歌集『秋の陽のなか』『六月の風』。昭和32年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅布教師。庵号/慈雲庵。

一行庵老師遺句集 『冬麗』をふたたび

淵上 磊山

1 はじめに

平成13年11月に一行庵中村義堂老師が歸寂されてはや8年が過ぎました。歸寂されて約1年後に、日頃詠み溜められました俳句の中から783句を選び、遺句集『冬麗』として熊本支部から出版いたしましたことはご存じかと思えます。

『冬麗』の冒頭に当時名誉総裁であられました故磨瓢庵白田劫石老師の一文を頂いておりますが、老師は文中次のように述べておられます。

【地域の医療に携わりつつ、禅による人間形成という厳しい風雪の中で磨かれた、高雅で明徹、悲しみを含む優しさの生の息吹が感得されます。義堂さんはその庵号が示すように、大法をすべてに優先し縁の下から支部を支え、一行三昧(注1)に徹する禅者でした。この『冬麗』は、ある意味では、人間禅の目指す『正しく・楽しく・仲のよい』人間像の一つの範例を示しているように見えます。】と。

熊本支部では、昭和40年前後より俳句活動が始まり、やがて俳句部として形を成してまいりますが、一行庵老師はこの中で一行三昧の日々を送られるとともに、多くの珠玉の句を詠まれております。

今ここに再び『冬麗』を取り上げて提示させていただきますのは、この俳句を通して老師の人となりとともに、禅者としての人間像をし

かと見ていただきたく、折しも教団に高まりつつある合掌運動（注2）の一助にもなればと願ってのことです。

句集を読み進みますと、「先師」追慕の句が多いことにお気付きになると思います。「先師」すなわち耕雲庵立田英山老大師に入門の翌年より侍者義堂として25年間仕えられ、その行履をつぶさにご覧になられた一行庵老師であります。ご傾



一行庵 中村義堂老師

倒がいかに大であったか、数々の俳句で窺い知ることができます。これがこの句集の特徴の一つです。

そして二つ目の特徴は、磨輒庵老師がいみじくもご指摘になりました「正しく・楽しく・仲のよい」人間像を示す俳句に満ちていることであろうと思います。

そこで、この集中の句をご披露いたします前に、老大師の熊本ご巡錫の折の俳句（後書の注を含む。）若干を句集『句津籠』（正・続）から抜粋させていただきます。

2 耕雲庵老大師の俳句

老妻と椎の実拾ふことも旅

幽石

十一月下旬 熊本支部の撰心会を例の細川家別邸にて開催す。（昭29）

空の義は説き尽し得ず亀鳴けり 幽石

熊本支部第13回摂心会にて『毒語心
経』を講了す。 (昭31)

^{たかな}春^な笋の皮惜しまれつ脱^むかれけり 幽石

熊本支部の^{てんぞ}典座(注3)は、初代よ
り伝統的に熱心なり。この程新旧交
代す。 (昭36)

^{あんどん}行灯の風呂場にひとり^{ふくろう}梟きく 幽石

熊本支部の摂心会場として借りたる
泰勝寺^{あと}址は、風呂場に電灯なし。
(昭38)

熊本道場

落慶の式^{りんご}凜乎たり初雷す 幽石

廿六日 菊池に^お於ける新道場の落慶
式を厳修する。 (昭46)

前4句は老大師にご不自由をおかけしました泰勝寺址での摂心会で詠まれたものですが、義堂侍者(後の一行庵老師)にとっても、工夫献身ただならぬ時期であったと思います。

最後の落慶式の句の中に「初雷」とありますが、当日は快晴で祝賀の宴も隠寮前の庭で行われ、春の雷が鳴ったとはとても思われません。実は式のご垂示の中で「道場ぐらい造るのは当たり前だ！」と大声で叱咤^{しった}され、皆度肝を抜かれたのでした。「初雷」とは自らの雷であったのです。まさに虚実の間に遊ばれる思い出深い一句であります。

3 一行庵老師の俳句

(1) 先師を憶う

老大師は、昭和50年に熊本支部担当の師家を青嶂庵荒木古幹老師にお譲りになりました。そして、昭和54年4月溘焉(注4)として眠るがごとく帰寂されたのであります。

生涯の師の骨納む秋の風 義堂 (昭54)

冬の夜の淋しさの師に及ぶなし " (昭57)

ただならぬ思い。先師の淋しさこそわが淋しさと、惻々と哀情迫りくるを覚えます。

なお、老大師は『句津籠』(続々)に次の句を遺されております。

妻葉子逝く

秋風や静かに一葉落ちにけり 幽石 (昭52)

秋天や師に騙されて四十年 義堂 (平成元)

「我師に騙されたり」と嬉々として詠う、まこと純真、そして直截、素裸の姿であります。

恐ろしき先師の夢や明け易し 義堂 (平7)

元来綿密に事を運ばれる老師でしたが、若い頃はよく「戦々兢兢」と言いもし、書いてもおられました。老大師のお供をして旅行に行かれることしばしばでしたが、途中で魔法瓶を割ってしまった失敗等話されていたことが思い出されます。夢にまで出る親父の顔は、決して笑顔ばかりではなかったであります。

とういす
 籐椅子のここに先師の手のありし 義堂 (平8)
 ささなき
 笹鳴や先師のお顔出て来さう " (平10)

平成8年、一行庵老師は熊本支部担当の師家となりました。隠寮には、広縁に籐椅子が置いてありました。師家として隠寮で過ごされ、籐椅子に身を委ねられた時、そうかこの背凭れには親父の背が、この肘掛けには親父の手が掛けられていたのだと、身近かくされた親しみが感懐深く詠まれております。冬鶯のチャッチャツという鳴声に、顔を覗かせられる髭のお顔をすぐ連想されたのでしょうか。優しくも綴られた先師追慕の句は34句を数えます。

以下見出しを一応「正しく」「楽しく」「仲よく」と付けましたが、これは便宜的に、大まかに分けたもので、互いに融合しあうものとお受け取り下さい。

(2) 正しく

無始無終眼横鼻直去年今年 義堂 (平10)

この句は年頭の互礼会に際して、寄せ書きに認められた句と記憶しております。漢字だけで成り立った俳句の内容・風姿の見事さをご覧ください。その気概、その生き様までも彷彿させる一句であります。

冬麗やわれ万象のひとつなる 義堂 (平8)
 吐く息も引く息も虫浄土なる " (平10)

昼となく夜となく道場に来て坐り続けられた数息三昧の姿が偲ばれます。

(3) 楽しく

み仏の背の闇より春蚊いづ	義堂	(昭49)
風炉 <small>ふうろ</small> 鳴るや秋の朝 <small>あき</small> の小暗 <small>こ</small> がり	〃	(昭51)
白砂にむらさき走る <small>とかけ</small> 蜥蜴 <small>とかけ</small> かな	〃	(昭59)
十葉や小鳥の墓のひとつ石	〃	(昭62)
一堂 <small>も</small> を守る生涯や木の実降る	〃	(昭62)
啓蟄 <small>けいちつ</small> の蜂 <small>はち</small> 潜み <small>をり</small> 不断草	〃	(昭63)
老鶯 <small>ろうおう</small> の青葉 <small>む</small> に噓せて鳴きにけり	〃	(昭63)
まなうらの母束髪や花ハツ手	〃	(昭63)
夏風呂 <small>てあけ</small> の手桶かんと笑ひけり	〃	(平元)
夏安居 <small>げあんご</small> のよし下肥 <small>く</small> を汲むことも	〃	(平 2)
爽 <small>さわ</small> やかや職に悔なき四十年	〃	(平 8)
みほとけのおん耳うごく初時雨	〃	(平 8)
初明り夢のまた夢引きあくる	〃	(平 9)
リンリンと鳴るかに阿蘇 <small>あしび</small> の花馬酔木	〃	(平13)

自然ふうえい諷詠の細やかな描写。分かり易やすく無理のない言葉遣い。

「むらさき走る蜥蜴」「小鳥の墓」「リンリンと鳴る花馬酔木」等に見る詩情の豊かさはどうでしょう。「手桶かんと笑」った夏風呂の茶目っ気ぶり。み仏をめぐる春には「蚊」、冬には「初時雨」と折々が感慨深く綴られております。

(4) 仲よく

名月や師に従うて影二つ	義堂	(昭41)
休らへば水引妻のうしろより	〃	(昭44)

山田 ^か 搔いて夫婦子犬と帰りけり	義堂	(昭46)
春 ^{しゅんとう} 燈や米寿の母を打ちかこみ	〃	(昭50)
往診の帰りなすびの苗二本	〃	(昭55)
妻の手に流れし月日梅を干す	〃	(昭57)
母の忌や父似母似の炬燵 ^{こたつ} かな	〃	(昭62)
春の夜の犬に ^{あいさつ} 挨拶してとおる	〃	(平2)
朝礼の菊より白き看護帽	〃	(平3)
妻病んで ^{こぞ} 去年も今年もなかりけり	〃	(平4)
相身互ひ ^{かれとうろう} 枯蝻螂の我を見し	〃	(平5)
みどり児も ^{じい} 爺もさびしや昼寢覚	〃	(平9)
糟糠 ^{そうこう} と言ふべし昼寢小さかり(注5)	〃	(平11)
嫁がせしよりの月日や ^{きり} 桐の花	〃	(平13)

「山田搔いて」帰った夫婦、「犬に挨拶して」通ったという何とも愉快な1件もありました。奥様はじめご家族の句もよく詠まれておりますが、巻末に近づくとつれて少し淋しげな句を見ることが多くなります。

(5) 晩年の俳句

平成12年、前年より2度ほど入退院を繰り返し、年末にご退院になり、正月にはご自宅で新年を迎えられました。

退院の朝かがよう寒卵	義堂	(平12)
退院のわれに妻あり炬燵あり	〃	(平12)
大の字になってもみたる初湯かな	〃	(平12)

久しぶりに帰ってきた我が家。その喜びが余す所なく^{あふ}溢れて、見事な句となっております。

この道や先師^{あかざ}黎^ひの杖を曳き 義堂 (平12)

癌^{がん}の症状は十分ご承知の身にして、なお先師への思い深く……

囀^{さえずり}の降る方丈や般若経 義堂 (平13)

この年6月の摂心会は、老師の今生最後の嘗弁となりました。

海行きし山行きし雲の峰行きし 義堂 (平13)

陸軍士官学校を経て航空士官として活躍された若き日々が、しかとここに遺^{のこ}っておりました。

冬麗^{ねしやか}や寝釈迦の胸に身を投げん(注6) 義堂 (平13)

平成13年11月、一行庵老師はこの絶唱を遺^{ゆうめい}して幽冥へ旅立たれました。

晩年の俳句は、殊に透き通るような珠玉の句が並び、すべて辞世の句の趣がありました。

秋天や今はの際^{さんげもん}の懺悔文 義堂 (平13)

『冬麗』掉尾^{とうび}の一句であります。

合掌

編集部注

一行庵老師の俳句を紹介した著者の『禅者の俳句 中村義堂』は、本誌8号(平成14年12月発行)に掲載されました。

(注1) 一行三昧：いつでも、どこでも、何ごとをするにも、それに全力を打ち込んで余念のないこと。正念相続のこと。

(注2) 合掌運動：人間禅は社会人による社会人のための禅の修行団体であり、道友の中には専門領域で優れた業績を上げている人、各種の文化活動や武道に長年精進している人が少なくない。そうした人間禅の特長を活かして、「正しく・楽しく・仲のよい社会」(世界楽土)を実現していかうとするものであり、現在「茶禅一味の集い」「剣禅一味の集い」「こころの教育セミナー」、企業内参禅会などが実施されている。

なお、「正しく」とは真理に合掌すること(真理を把握し、実行すること)、「楽しく」とは自己の仏性(真実の自己)に合掌すること、「仲のよい」とは他の仏性に合掌することをいう。

(注3) 典座：禅の道場で修行者の食事を担当する役職をいう。

(注4) 溘焉：急なさま。

(注5) 糟糠：「糟糠の妻」の意に用いられている。(酒粕さけかすや糠ぬかなどの粗末な食べ物を分け合って食べるような) 貧しい時から連れ添って苦労を共にしてきた妻、また長年連れ添ってきた妻のこと。

(注6) 寝釈迦：釈迦が入滅した時の寝姿をかたどった像。この句では、寝釈迦のように横たわる阿蘇五岳の連山をいう。なお、老大師には<霧襖きりぶすまごしに尊き寝釈迦かな> 昭46)の句がある。

著者プロフィール



ふちがみらいざん
淵上磊山(本名/彌一)

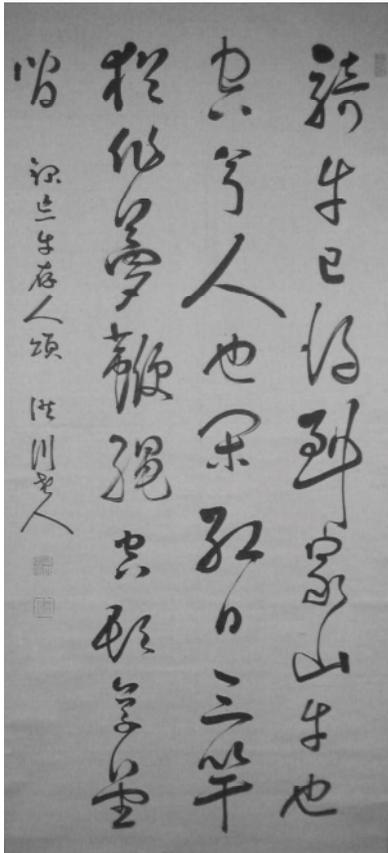
大正13年生まれ。昭和24年、人間禅立田英山老師に入門。現在、人間禅布教師。軒号/雙泯軒。

人間禅の書(四)

今北洪川禅師の書

藤井 紹滴

今回は、幕末維新を代表する臨済宗の宗匠 今北洪川禅師の墨跡を見てみます。人間禅は今北洪川禅師の法孫として深い因縁があるため、禅師の偉業を偲^{しの}び、人間禅の書として書かせてもらいます。



今北洪川禅師の書

墨跡の第一印象は、明治に入って書かれたものだろうが、江戸の風情を感じず^{からよう}る唐様(明、清時代の書風)を色濃く残した草書体と思った。禅師が明治維新になった時52歳なので、当然ともいえる。前号の宗演禅師の、うまいんだか、まずいんだか、さっぱりわからぬが、よく見ればきびしく一筋通った素晴らしい書とか、前々号の宗活老師の、どこから突いてもごまかしのない、鍛え上げた^{かんべき}完璧な用筆で、厳しく一貫^{てら}していてもまさに法書と言えるものでもない。むしろ平凡で少しも奇を衒^{てら}うこともなく、気張って人を驚かすでもない、万事平凡な唐様である。上手でもなく、下手でもない。巧拙入り交る自然体とでも言うべきか。

この書は、『十牛図』第七の「忘牛存人」の廓庵和尚の頌（注1）を書かれたものである。書き出しの3字は慎重で筆運びも硬い。4字目から動きが急に自在となり、思いもかけぬ連綿草となる。「到」のりっとうの思いきり長く引いた、細いけれど強い線を軽くウ冠で受け、「家」から「山」へ軽妙に受けつなく見事な筆致が、「山」の最終画で、どうなさったの？と聞きたくなるような無造作な一画で終る。巧と拙の妙と言うべきか。2行目後半の「紅日三竿猶作夢」は、墨をつぎ足した後、句の意に従ったのか急に動きも用筆も拙となり、たどたどしくなる。「紅日」をつなぐ線、「三竿」をつなぐ線とも軽薄で、1行目のような緊迫感はなく情線（注2）である。しかし、3行目の結句「鞭繩空頓草堂間」になると、それまでとまるで違った、熟した用筆になり、線も頗る強い。結局、巧拙、^{うよ}紆余曲折して終る。

全体を通して見れば、^{はたん}破綻は隠れ、^{ちゅうよう}万事中庸の書。最後の落款識の「録忘牛存人洪川老人」は何ともつつましやかにボソボソと書いているが、それも一貫してほほえましく、ホッとする。以上が表面的見方である。

別の観点に立てば、超格の宗匠らしい恐ろしさがある。どの線もまことに強い。弱々しい線は全く引いていない。書は線の芸術と言うが、健康で^{はつらつ}滌刺としている。それが始めから終わりまで少しも途切れていない。鍛えられた内面の強さである。一線一線追いながら見てゆくとよくわかる。ことに3行目の線の持ってゆき方の強さと柔らかさが何のこだわりもなく出ていて、まことに恐ろしい。これはまねができない。表面上の



関坊印



落款印

巧拙と、内面上の剛柔を合わせ、全体で自然に一幅をなす。更によくよく見ていると私には禅僧の書と言うより、学者、儒学者の書に見えてくる。関防印は「臨濟正宗」、落款印は白文(注3)が「沙^{しゃ(さ)もん}門宗温^{ほん}」(宗温は法諱)、朱文が「洪川」、表装はもみ紙風の紙表装で、大正昭和の初期によく使われた。寸法は天地137センチ、幅62センチでほぼ全紙。箱書、ふた表書きは「圓覚洪川老師忘牛存人頌」裏書きは「大夜」。「老書生」の印あり。東京谷中擇木道場蔵。

洪川禅師については、本誌1号(通巻181号)(平成13年刊)に詳しい。文化13年(1816年)生まれ。明治25年(1892年)示寂。父今北善蔵忠久は儒者。確^{かつ}乎^こ斎^{さい}。幼^わ兒^ごより儒学を学ぶ。14歳藤澤東^{とう}咳^{がい}に入門。東^そ咳^{らい}は徂^お徠^{ぎゅう}学者。荻^お生^ぎ徂^らは初^はめ朱子学を奉じたが、古義の研究により經義を解せんとした。また詩文を兼ね研究。徂徠学としては、修徳より政治的、經世済民の道を実学的に明らかにせんとした。伊藤仁斎の倫理的、修身的行き方と異なる。のち徂徠学は經義研究と詩文の学の二派に分かれるが、やがて朱子学、陽明学、古学の長をとる折衷学派が生まれ出てくる。禅師も徂徠学から折衷学に進む。そのためか、その著『禅海^{いちらん}一瀾』を読めば、儒仏二教の調和がよく説かれているのがわかる。25歳で相国寺の大拙承演のもとで出家。明治8年円覚寺に入り、明治19年より円覚寺管長に就任。

終わりに、「忘牛存人」の頌の読みに触れておく。

騎牛已得到家山	牛 ^の に騎 ^す りて已に家山に到るを得たり(注4)
牛也空兮人也閑	牛また空じ 人また閑なり
紅日三竿猶作夢	紅 ^{さん} 日 ^{かん} 三竿 猶 ^な ほ夢をなす(注5)
鞭繩空頓草堂間	鞭 ^{べん} 繩 ^{じょう} 空しく頓 ^な く 草堂の間
録忘牛存人頌	忘牛存人の頌を録す
洪川老人	洪川老人

頌詩は七言絶句平起格。韻は上平声十五刪。山、閑、間。書の解説が主なので頌意は簡単に述べると、「忘牛存人」とは、自利の極、帰家穩坐の境涯。その序に【法に二法無く、牛をしばらく宗となす】とある。「法に二法無し」で、求める人（心）と、求められる牛即ち本当の自性（注6）は、本来二つ別々にあるのではなく、全く同じものであった。『十牛図』は、ここまでの悟後の修行では、



立田英山著『十牛の図講話』より

牛即ち本来の自己を主題としてきたが、この第七では、もはや牛の姿はなく、求める人も閑である。牛また空じ、人また閑なりとなる。従って牛を打つむちも、牛をつなぐ縄も草堂に置いたままとなる。

編集部注

- (注1) 頌：偈頌。宗旨を含んだ詩のこと。「宗旨」は、もっとも根本的かつ本質的な教え。
- (注2) 情線：だれてむだな線。
- (注3) 白文：白字。印章で凹状に彫った文字。押印すると、文字が白抜きに現れる。朱文（朱字）
- (注4) 家山：故郷の山。ふるさと。わが安息所。
- (注5) 紅日三竿：「紅日」は、あかく輝く太陽。「三竿」は、日や月が高く昇ったこと。
- (注6) 自性：すべての人が生まれながらにして持っている仏性。

著者プロフィール



藤井紹滴（本名／頼次）
しやうてき

昭和15年、東京生まれ。会社経営。金子清超先生から儒学、書を学ぶ。無窮会にて儒学研究。研究にゆきづまり、昭和46年以来、長屋喜一先生から禅の指導を受ける。昭和61年、人間禅白田劫石老師に入門。現在、人間禅輔教師。